

## 介護等体験を終了した学生の感想

### Dさん

私の小中学校時代の同級生に障害を持つ人がいたために、特に障害者に対して「怖い」と感じることはなかった。そのため特別支援学校での実習といえども、教育実習の延長だという気持ちで臨んだ。小学部の配属であったために、基本的な生活のリズム、決まりを繰り返し指導するということが中心であった。話すことが難しいために、手話を使ってコミュニケーションをとるといった児童も少なくなかった。私がこれまでに見てきた障害者は同級生の男の子ただ一人だったので、みんな同じような症状であるとばかり思っていたが、実際はそうではなく、一人ひとり、苦手なこともあれば得意なこともあり、普通学校とあまり変わらないのだと感じた。

特別支援学校で身をもって感じたことは「全て手伝う」のではなく「やるように促す」ということの大切さである。全て手伝えば確かに時間がかからないが、児童のためにはならない。「自分でできるようになる」ということが子どもたちの目標だからである。機会があって、中学部の方も体験させてもらったが、小学部と比べてやはり大人で、自分のすべきことを理解し、自分で考えて行動しているという面が見られた。小学校6年間で訓練してきたためにここまでできるようになったのだと、中学部の先生が話してくれ、やはり、「やるように促す」ことが本人達にとってどれほど重要なことかを実感することができた。

社会福祉施設では、特別養護老人ホームへ行き、初めて介護の現場を目の当たりにした。毎日が同じ事の繰り返しで、おむつ交換、入浴介助、食事介助、給茶補助をひたすら行った。初めのうちは何を話してよいのか全く分からなかったが、介護士さんに相談してみると若い頃の話や出身地の話、趣味の話をするとういことを聞き、実際にためしてみた。すると、楽しそうに利用者さんが話してくれた、私も楽しくなった。

しかし、介護の現場は辛いことの方が多かった。夫を胃がんで亡くし、食べる＝苦しいと考えて鬱になってしまった利用者さんに食事介助をすると、嫌がり部屋に戻ろうとする。薬を飲ませないといけないので少し無理やりに食べさせる。人権を考えたらどうしたらよいのか分からなくなり、本当に大変だった。認知症がそこまで進んでいない利用者さんからは入浴介助をすると「申し訳ない」という言葉をよくかけられた。この言葉で思ったことは、誰も「介護を受けたくて介護を受けているのではない」ということである。本当なら、自分のことは自分でしたいはずである。このような人たちに冷たく当たってしまうことは、してはならないことであると思う。

2つの施設で体験させていただいて学んだことは、健常者は障害者よりえらいということではなく、同じ人間であり、お互いをいたわりあうということの大切さである。障害を一種の個性とみなし、人権を尊重して生きていくことが大切である。教員になったらこのようなことを子ども達に伝えていきたい。

